

島本町文化財調査報告書

第 10 集

広瀬地区・青葉地区遺跡範囲確認調査概要報告

平成 19 年 3 月

島本町教育委員会

序 文

島本町には、先人たちが大切に遺してきた数多くの文化財の存在が周知されています。これらの文化財を守り、後世に正しく伝えることは、現代を生きる我々の責務であります。教育委員会では、埋蔵文化財についてもその保護と周知を行なうとともに、未だ遺跡の確認されていない地域での調査も実施し、新たな埋蔵文化財の発見にも努めています。

本書は、広瀬地区および青葉地区における遺跡の拡がりを把握することを目的として、平成17年度および、平成18年度における国庫補助事業として実施した、遺跡範囲確認調査の成果を報告するものであります。

調査にあたりまして、多大なご指導ご協力を賜りました関係諸機関の皆様には、深く感謝します申し上げますとともに、本町の今後の文化財保護行政に対し、変わらぬご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年3月

島本町教育委員会

教育長 森川 正啓

例　　言

1. 本書は、平成17年度および、18年度国庫補助金事業として、大阪府教育委員会事務局文化財保護課の指導のもと、島本町教育委員会が実施した広瀬地区および青葉地区的遺跡範囲確認調査報告書である。
2. 調査は、島本町教育委員会事務局生涯学習課嘱託職員中津　梓を担当者とし、平成18年度の調査については、平成18年11月27日に着手し、平成19年3月30日に本書の刊行をもって完了した。
3. 調査および整理作業にあたっては、下記の調査員の参加を得た。(順不同)
【調　　査　　員】　久保直子、坂根　瞬
4. 本書の執筆は、中津が行ない、作成・編集は中津、久保が行なった。

5. 現地作業および整理作業においては、関係各機関ならびに、下記の方々には貴重なご指導ご教示を賜った。記してここに感謝の意を表します。(敬称略、順不同)
大阪府教育委員会文化財保護課、財團法人長岡市埋蔵文化財センター、久保哲正(京都府教育委員会事務局文化財保護課)

凡　　例

1. 本書に用いた標高は、東京湾平均海面(T. P.)を基準とした数値である。方位は、国十座標第VI系における座標北である。
2. 土層断面図の土色は、小山正忠・竹原秀夫編『新版標準土色帖』第12版を使用した。
3. 遺構記号については、以下の通りである。

P : ピット SD : 溝 SK : 上坑 SX : 性格不明遺構

目 次

序 文

例 言

目 次

I 周辺の環境	1
II 調査の概要	2
- 1 平成17年度広瀬地区遺跡範囲確認調査	2
1. 検出遺構	4
2. 出土遺物	4
- 2 平成18年度青葉地区遺跡範囲確認調査	6
1. 検出遺構	9
2. 出土遺物	9
III まとめ	12

挿図目次

第1図 調査地位置図 (S=1/5000)	2
第2図 調査区平面図 (S=1/200)	3
第3図 S D01断面図 (S=1/40)	4
第4図 出土遺物実測図 (S=1/2・1/4)	5
第5図 調査地位置図 (S=1/5000)	6
第6図 調査区平面図【遺構面I・II・III】(S=1/100)	7
第7図 調査区断面図 (S=1/50)	8
第8図 S D01遺物出土状況図 (S=1/30)	9
第9図 遺構面I上層掘削時出土遺物 (S=1/2)	10
第10図 遺構面II・遺構面II下層掘削時出土遺物 (S=1/4)	10
第11図 遺構面III出土遺物 (S=1/2・1/4)	11

図版目次

図版 1 広瀬地区確認調査

調査区全景（南から）

S D01 土層断面（南から）

図版 2 広瀬地区確認調査 表探・各遺構出土遺物

図版 3 青葉地区確認調査

調査区北半 遺構面Ⅱ全景（南から）

調査区南半 遺構面Ⅱ全景（北から）

図版 4 青葉地区確認調査

調査区南半 遺構面Ⅱ S D01遺物出土状況（南から）

調査区南半 遺構面Ⅱ下層掘削時高杯出土状況（北から）

調査区南半 遺構面Ⅲ S D02検出時遺物出土状況（北から）

図版 5 青葉地区確認調査

調査区北半 遺構面Ⅲ全景（南から）

調査区南半 遺構面Ⅲ全景（北から）

図版 6 青葉地区確認調査 遺構面Ⅰ・Ⅱ出土遺物

図版 7 青葉地区確認調査 遺構面Ⅲ出土遺物

I 周辺の環境

地理的環境

島本町は大阪府の北東端、京都府との府境に位置する面積16.78km²の町である。北は京都市西京区、長岡京市、北東は大山崎町、東南は八幡市、南は枚方市、西は高槻市に隣接する。町域の東南部で、木津川、宇治川、桂川の三川が合流して南西に流れる淀川がつくり出す地形は、北側の天王山山塊と南の生駒山地の南端となる八幡市の男山丘陵とを分ける山崎狭隘部と呼ばれる。また、平安京と大宰府を連絡する山陽道（江戸時代には西国街道として継承される）が通り、古くから島本町の歴史の発展を支える重要な条件となってきた。自然環境の面にも恵まれ、大阪府の天然記念物に指定されている、「大沢のスギ」・「尺代のヤマモモ」・「若山神社のツブラジイ林」があり、豊かな自然が残されている。

歴史的環境

島本町では、町の全域に点在する史跡とともに、埋蔵文化財包蔵地として17遺跡が周知されている。山崎地区では、山崎西遺跡で国府型ナイフ形石器が採集されており、町域での生活の始まりは旧石器時代に遡る。縄文・弥生時代については、桜井地区の越谷遺跡で土器が出土していることから、狩猟・採集の生活から稻作の生活へ移行するあいだも、人々の生活が途切れることなく営まれたことが想像される。なお、桜井遺跡でも弥生時代後期の土器が採集されている。古墳時代については、前述した桜井地区の越谷遺跡で土器・埴輪が出土しているほか、源吾山遺跡と神内古墳群からは、古墳の副葬品であろう土器や鉄器が出土・採集されており、付近の山麓における古墳の築造が窺える。奈良時代には、東大寺地区に近い山崎地区の鈴谷に瓦窯が造られ、瓦窯の発掘時には平瓦・丸瓦が出土した。また、水無瀬川の西南側には、奈良の東大寺が所轄する「水無瀬荘」が造営された。

その後、都が平城京から長岡京、そして平安京に遷るにつれ、『延喜式』にある山崎駅の記述および『土佐日記』・『更級日記』にある山崎津の記述にあるように、島本町は交通上重要な位置を占めるようにもなった。広瀬地区全域に広がる広瀬遺跡では、奈良時代から室町時代におよぶ竪穴住居や柱穴、溝が検出されており、それらから土器や瓦などが出土している。前述の東大寺地区の水無瀬荘推定地にほど近いことから、荘園の管理に携わっていた人々の生活する集落であった可能性も考えられる。室町時代以降については、桜井地区の桜井駅跡遺跡で、室町時代から江戸時代末におよぶ井戸や大型柱列、区画溝、遺物集積構造などが検出されている。土器や陶磁器などが出土していることから、大規模な建造物などがあったと考えられる。また、西国街道の路肩および側溝の可能性のある道路状遺構も検出されている。明治以降については、地割などは現在と大きく変わらないようであるが、地域の方々によると、桜井、青葉から上牧あたりにかけては田地が統一され、長閑な風景の拡がりが見られたようである。

II 調査の概要

本調査事業は、平成13年度から国庫補助金事業として島本町内で周知される埋蔵文化財包蔵地範囲内・外で遺構・遺物の有無などを確認するために行なっているものであり、平成18年度がその6年目にあたる。

平成17年度では、桜井一丁目の町立歴史文化資料館の敷地内における桜井駅跡遺跡範囲確認調査、大規模宅地造成の事前試掘時に遺構面を確認し、緊急発掘という形で行なった広瀬五丁目における、広瀬地区遺跡範囲確認調査の2件の調査を行なった。桜井駅跡遺跡範囲確認調査については、その成果を『島本町文化財調査報告書』第8集に報告済みであるが、広瀬地区遺跡範囲確認調査については、年度末の調査となり、成果報告を今年度に延ばすこととなった。

平成18年度は、青葉三丁目の町上下水道部の用地における青葉地区遺跡範囲確認調査、桜井一丁目の町立歴史文化資料館の敷地内における桜井駅跡遺跡範囲確認調査、広瀬三丁目の水無瀬神宮の敷地内における広瀬地区遺跡範囲確認調査の3件の調査を行なった。青葉地区以外の2件については、2月中旬以降の調査であったため、成果報告を来年度に延ばすこととする。

- 1 平成17年度広瀬地区遺跡範囲確認調査

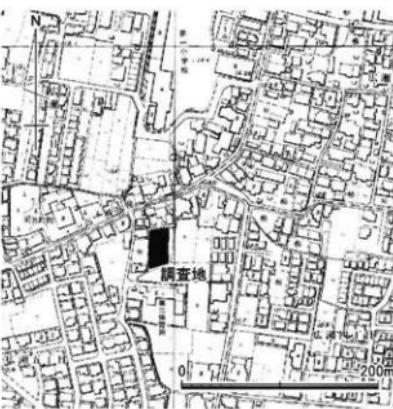
調査期間：平成18年3月23日（木）から3月31日（金）

調査地：大阪府三島郡島本町広瀬五丁目地内

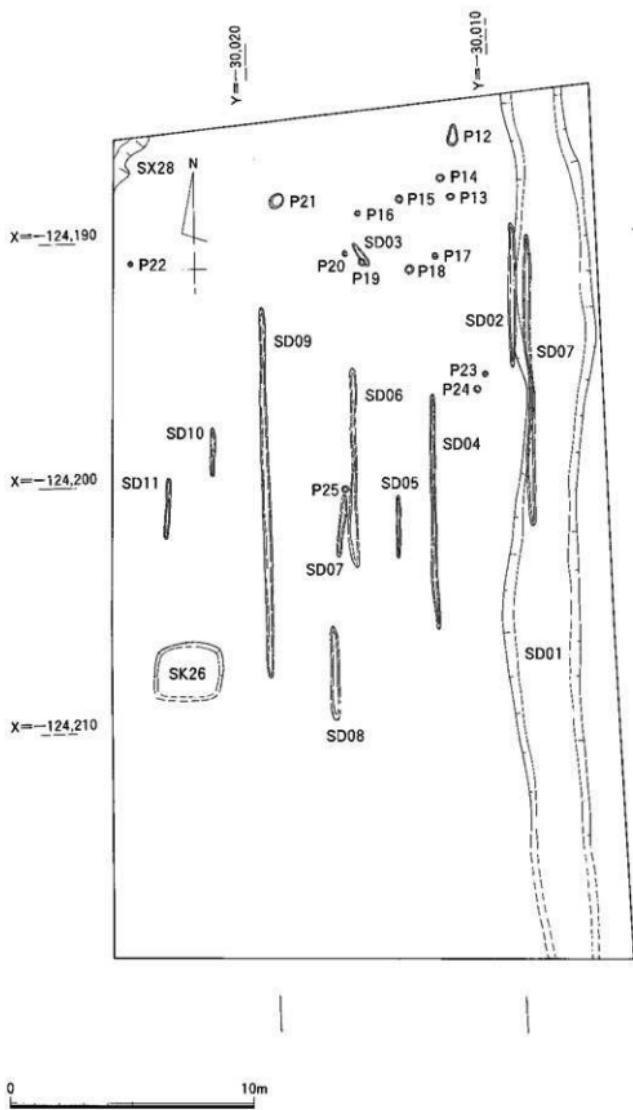
調査面積：約600m²

今回の調査は、開発行為に伴う緊急発掘調査であり、東西約20m、南北約30mの約600m²を調査した。調査方法は、地表面から約10cm掘削すると遺構面を検出するという状況であったため、重機で薄く掘削した後、精査して遺構面および遺構の検出や、遺物採集を行なった。

なお、調査の記録作業は、調査区の平面（S=1/100）、遺構の断面（S=1/20）の図化や写真撮影を行なった。調査区の断面については、地表面から遺構面までが田の床土一層のみであり、前述のとおり約10cmの堆積にとどまったため、作図を省いた。



第1図 調査地位置図 (S=1/5000)



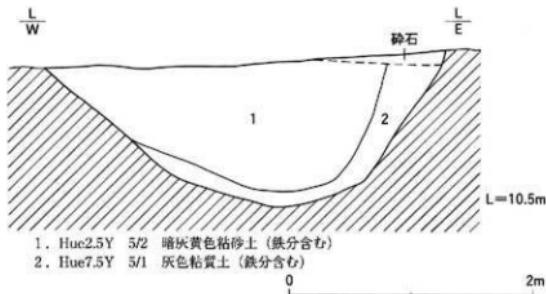
第2図 調査区平面図 ($S = 1/200$)

1. 検出遺構

今回の調査では、中世後半から近世中頃までに相当すると考えられる遺構面を検出した。主な遺構としては、近世から現代に至るまでの田地を耕作する際にできる南北方向の鋤溝と、ピット、大溝があげられる。以下に、主な遺構についてその概要を示す。

S D01 (第3図・図版1)

調査区の東端で検出した、調査区の北端から南端へと続く、幅約3.2m、深さ約1.2mを測る南北方向の大溝である。調査区外へ伸長することから、集落単位をあらわす溝である可能性も考えられる。埋土内より、瓦器



第3図 S D01断面図 ($S=1/40$)

椀の口縁部2片および、鉄器が3片出土した。

P 12

調査区北端付近で検出した、南北90cm、東西40cmほどのピットである。埋土内より、羽釜の口縁部および脚部が出土した。

P 13

調査区北端付近で検出した、直径20cmほどのピットである。埋土内より、土師器皿の口縁部1片が出土した。

P 16

調査区北端付近で検出した、直径20cmほどのピットである。埋土内より、瓦器皿の口縁部1片が出土した。

2. 出土遺物 (第4図・図版2)

今回の調査では、土師器皿・綠釉陶器・瓦器椀・瓦器皿・羽釜・平瓦・陶磁器・錢貨・鐵製品などが出土した。大半が中世後半から近世中頃に相当する遺物であり、個体数では土師器皿がもっとも多かった。全体として、ごく小片の遺物が大多数を占めたため、図化し得たものは10点ほどであった。図化および写真を掲載した遺物について、以下にその概要を示す。

土師器皿（1～3）は、いずれも小片である。1・2については表探遺物であり、3はP 13出土遺物である。室町時代後期（15世紀末頃）のものである。

綠釉陶器（4）は、高台部分のみ残存している。激しく磨滅しており、表面には綠釉は残存し

ていないため、一見すると無施釉陶器かと思われるが、高台部分の内側に若干の線軸の残存が見られる。これについては表掲遺物である。室町時代前期（14世紀中頃）のものと考えられる。

瓦器皿（5）については、口縁部片であり、P16出土遺物である。内面調整として、強めの指サエが見られる。鎌倉時代後期（13世紀半ば～末）のものと考えられる。

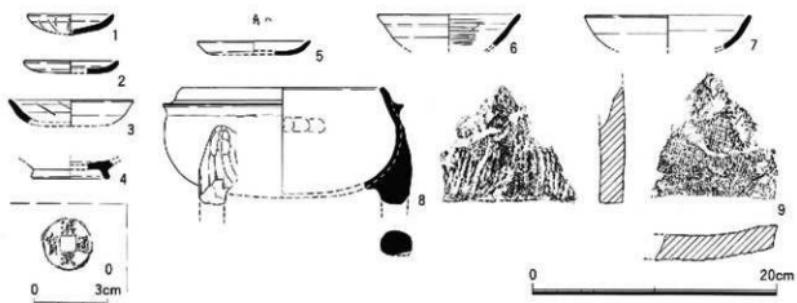
瓦器椀（6・7）は、それぞれ口縁部片であり、S D01出土遺物である。6については、内面にヘラミガキが施されているが、7については、強めのナデで仕上げている。ともに、口縁部内面に沈線は見られず、器壁が約5mmを測り、やや厚めである。瓦器皿と同様、鎌倉時代後期（13世紀半ば～末）のものと考えられる。

羽釜（8）は瓦質のもので、口縁部片および脚部片であり、P12出土遺物である。これについても、鎌倉時代後期（13世紀半ば～末）のものと考えられる。

平瓦（9）は、表に繩目、裏に布目の着いたしっかりした作りのものであり、約1/3残存している。宅地造成時に調査区外の南側の側溝掘りを行なった際に出土した。平安時代頃に相当すると思われるが、詳細な時期については不明である。

銭貨（10）は、洪武通宝であり、S D28出土遺物である。洪武通宝については、明代初期である応安元年（1368）に初鋳された銭貨であり、日本で多く使用されたもののひとつとしてよく知られる。

鉄製品は、出土した4点のうち3点がS D01出土遺物、1点がS X28出土遺物である。S D01出土の鉄製品3点については、鉄釘であると思われるが、鉄錆の付着が多く、明らかではない。S X28出土の鉄製品については、片端が尖り、もう片端が輪になったもので、元は尖った部分を木材に打ち込み、輪の部分が連なるという類の製品であると思われる。用途・時期ともに不明のため、今回図化せず写真のみの掲載である。



第4図 出土遺物実測図（S=1/2 · 1/4）

- 2 平成18年度青葉地区遺跡範囲確認調査

調査期間：平成18年11月27日（月）から12月25日（月）

調査地：大阪府三島郡島本町青葉三丁目地内

調査面積：約60m²

今回の調査は、町の上下水道部用地を借用し、約60m²を調査した。調査方法は、地表面から約1m盛り土を重機で機械掘削し、その後一層ごとに人力掘削しながら遺構面および遺構の検出を行なった。調査地が狭小であったため、土置き場を考慮して北半・南半に分けて発掘を行なった。今回の報告はそれぞれの成果をまとめた形で行なうこととする。

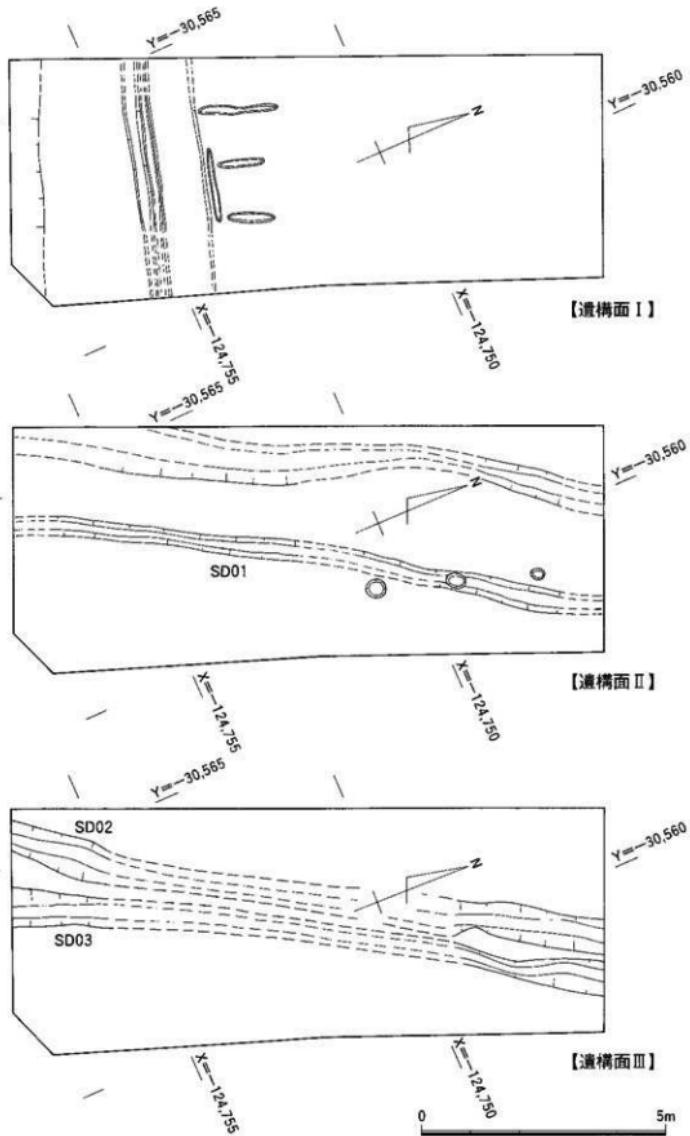
なお、調査の記録作業は、調査区の平面（S=1/50）、調査区の断面（S=1/20）および遺物出土状況（S=1/20）の図化や写真撮影を行なった。

今回の調査区の層位（第7図）については、盛土が約1mほどあり、盛土を除去すると床土（第1層）が堆積している。第1層を除去すると、自然堆積層（第4層）が薄く堆積し、第4層を除去すると、近世包含層（第7層）が検出され、この層の上面が遺構面Iとなっている。第7層を除去すると、奈良時代包含層（第9層）が検出され、この層の上面が遺構面IIとなっている。第9層を除去すると、自然流路堆積層（第10層）が検出される。この層は1～3cm程度の礫が多く含まれており、中には土器の碎片なども見られる。第10層を除去すると、弥生時代包含層（第14層）が検出され、この層の上面が遺構面IIIとなっている。第14層を除去すると、自然堆積層が数層堆積し、地山と考えられる第18層が検出される。

今回の調査区の壁面は大半が整然とした堆積となっているが、調査区の外周部に水道管の埋管が施されているため部分的に堆積が乱れ、特に調査区東端については一部著しく搅乱を受けていた。搅乱部分に混入していた遺物の中には、平安時代前期に相当すると思われる石製品や、弥生時代の石器など、遺跡の位置付けをするうえで重要な遺物も含まれている。遺構に伴わず、どの包含層からの出土でもないという“搅乱部分出土”的遺物について、その性格を考えるのは困難であるが、様々な時代の遺物が出土し、当該地域での生活の連続性を示すものであることは確かである。

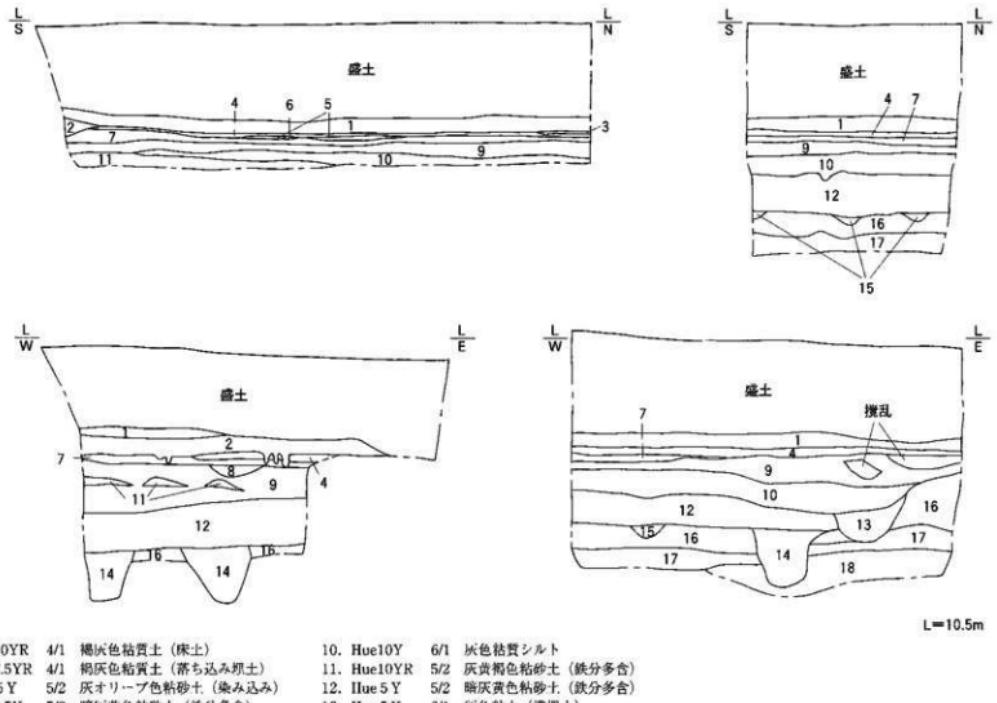


第5図 調査地位置図 (S=1/5000)



第6図 調査区平面図【遺構面Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ】(S=1/100)

第7図 調査区断面図 (S=1/50)



0 3m

1. 検出遺構

今回の調査では、江戸時代（遺構面Ⅰ）・奈良時代（遺構面Ⅱ）・弥生時代（遺構面Ⅲ）の遺構面を検出した。主な遺構としては、遺構面Ⅰで田地を耕作する時にできる、東西・南北方向の鋤溝、遺構面Ⅱで南北方向の溝、遺構面Ⅲで南北方向の2本の溝を検出した。以下に、遺構埋土内に遺物の出土が見られた遺構について、その概要を示す。

S D01（第8図、図版3・4）

遺構面Ⅱにおいて検出した、幅約50cm、深さ約15cmの南北方向の溝である。調査区の北端から南端にかけて伸長する。埋土内より、奈良時代初め頃（8世紀初頭）の土器器杯および奈良時代末（8世紀末）の土器器杯が出土した。

S D02（図版4・5）

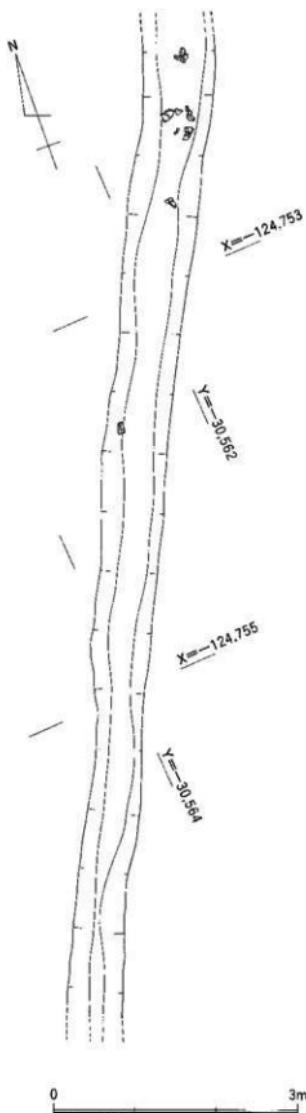
遺構面Ⅲにおいて検出した、幅約70cm、深さ約60cmの南北方向の溝である。調査区の北端から南端にかけて伸長する。埋土内より、弥生時代中期初頭（紀元前2世紀頃）の弥生土器が数個体分出土した。なお、平行して同時期の溝S D03が走るが、この溝からは出土遺物はなかった。

2. 出土遺物

遺構面Ⅰ上層掘削時出土遺物（第9図・図版6）

遺構面Ⅰ上層掘削時出土遺物としては、石製品・土製品・陶磁器・瓦などがあげられる。図化し得た遺物について、以下に概要を述べる。なお、陶磁器・瓦については現代のものであったため、作図は省いた。

石製品（1）は、平安時代初めから中頃（8世紀初頭から10世紀末頃）に相当する。厚さは7mmで、暗灰色を呈している。両面に石挽き鋸の痕跡が見られ、巡方の未製品である可能性がある。方形板状の



第8図 S D01遺物出土状況図 (S=1/30)

破片である。材質については未確定である。

土製品（2）については、円形を呈し、江戸時代中頃（18世紀）以降のものと思われるが、その用途は不明である。内側が軽く湾曲しており、胎土は赤褐色である。

遺構面Ⅱ出土遺物（第10図・図版6）

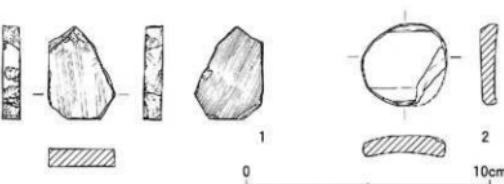
遺構面Ⅱ出土遺物は、SD01埋土内より出土した、奈良時代の土師器杯2点のみである。土師器杯（4・5）は、いずれの胎土も赤褐色を呈する。口縁部の形態などにより、4は奈良時代初め頃（8世紀初頭）、5は奈良時代末頃（8世紀末）に相当するものであると考えられる。なお、5の土師器杯の底部外面には、4cmほどの直線が井の字形に数本ずつ直交するヘラ書き文が見られる。これについては、土器の製作者を示す印などさまざまな想定が可能であるが、詳細は不明である。

遺構面Ⅲ下層掘削時出土遺物（第10図・図版6）

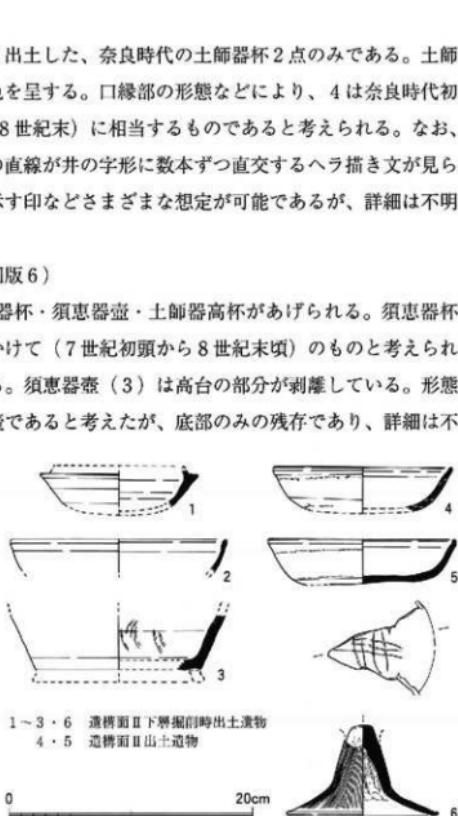
遺構面Ⅲ下層掘削時出土遺物は、須恵器杯・須恵器壺・土師器高杯があげられる。須恵器杯（1・2）は、飛鳥時代から奈良時代にかけて（7世紀初頭から8世紀末頃）のものと考えられる。1は短い立ち上がりをもつ杯身である。須恵器壺（3）は高台の部分が剥離している。形態および内面に施されたタキ調整から、壺であると考えたが、底部のみの残存であり、詳細は不明である。土師器高杯（6）は、脚部のみの残存であるため、杯部分の形態については不明であるが、古墳時代中期（4世紀末から5世紀）のものと考えられる。外側調整は目の細かい縦方向のハケメを施し、内面調整は指ナデを施した、丁寧な作りとなっている。

遺構面Ⅲ出土遺物（第11図・図版7）

遺構面Ⅲ出土遺物は、弥生土器・石器があげられる。弥生土器（1～5）は、弥生時代中期初めから中頃までに相当する第Ⅱ様式と考えられる。1～4については口縁部のみの残存である。1は壺の



第9図 遺構面Ⅰ上層掘削時出土遺物（S=1/2）

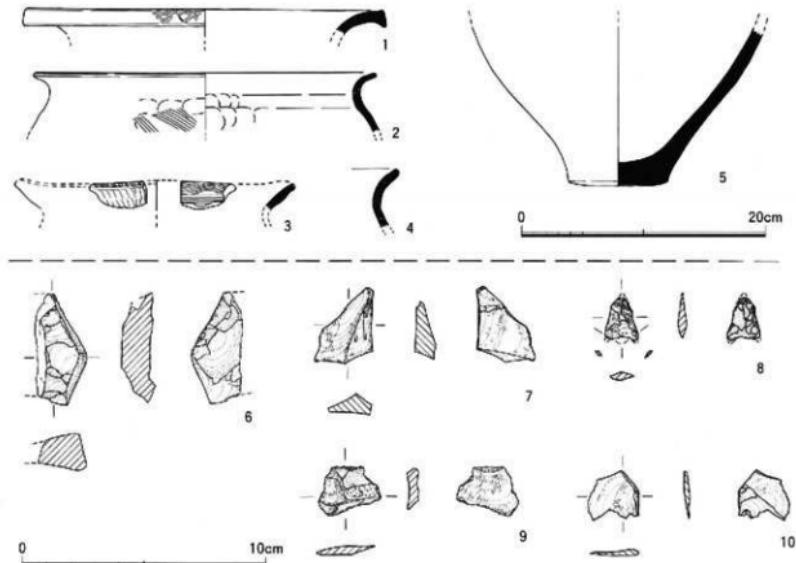


第10図 遺構面Ⅱ・遺構面Ⅲ下層掘削時出土遺物

(S=1/4)

口縁部であり、肥厚させた端面に櫛描波状文を施している。摂津第II-2様式に相当するものである。2~4は壺の口縁部である。2は外面調整としてハケメを施し、内面の頸部付近には指圧痕が残る。これについても、1と同様に摂津第II-2様式に相当するものである。3はやや波状口縁となっており、口縁端部に刻み目を施し、その内面には櫛描波状文を施している。このような特徴から、おそらく近江第II-3様式に相当するものと思われる搬入品である。4は外面・内面ともに磨滅しており調整等については不明である。5は壺の底部である。外面・内面ともに磨滅し、一部については剥離しており調整等については不明であるが、形態から摂津第II-1様式に相当するものと思われる。なお、今回図化はしていないが、他に2個体分の体部片が出土している(図版7)。1個体は胸部上半に櫛描波状文を施しており、もう1個体は胸部下半にヘラミガキを施している。いずれも摂津第II-2様式に相当するものである。

石器(6~10)は、弥生土器と同様に、いずれも弥生時代中期初めから中頃にかけて(紀元前2世紀頃)のものと考えられる。6・7はサスカイト製石核である。6については、背面の一側辺に調整剥離を施している。8はサスカイト製打製石鎌である。先端および基部の両端が欠落しているが、凹基式鎌である。9・10はサスカイト製剥片で、9については、一部に礫面が残る。



第11図 遺構面III出土遺物 ($S=1/2 \cdot 1/4$)

III まとめ

平成17年度広瀬地区遺跡範囲確認調査および平成18年度青葉地区遺跡範囲確認調査について、得られた成果を以下にまとめる。

広瀬地区遺跡範囲確認調査では、南北方向に走り、集落の単位を示す可能性をもつ大溝および、南北方向の鋤溝を数条検出した。広瀬地区は、その全域が奈良時代から室町時代にかけての集落遺跡である広瀬遺跡の包蔵地となっているが、これまで集落の具体的な様相がわかる調査成果に乏しい状況であった。今回の調査における南北方向の大溝の検出により、何らかの区画を設ける必要があったことが窺える。また、島本町の東大寺地区に、東大寺領水無瀬荘の推定地が存在することから、莊園の地割単位を活かして区画を設けるなどして、後世まで引き継いでいる可能性も考えられる。

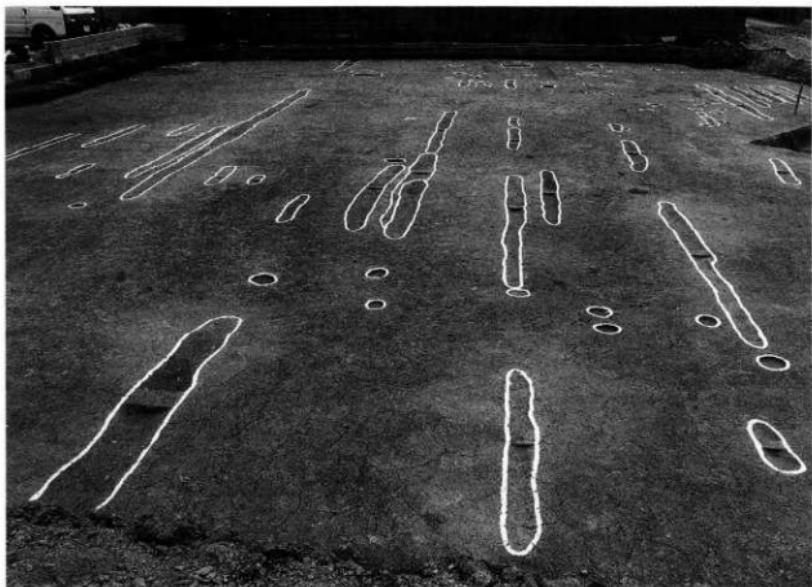
青葉地区遺跡範囲確認調査では、室町から江戸時代初期の遺構面で、南北方向および東西方向の鋤溝を数条、奈良時代の遺構面で南北方向の溝を1条、弥生時代の遺構面で南北方向の溝を2条検出した。室町から江戸時代初期の遺構面では、昨年度JR新駅の駅前広場整備に伴い行なった発掘調査時も、同様の鋤溝を検出していることから、当該期における桜井地区から青葉地区にかけての、農地の拡がりを確認することができた。奈良時代の遺構面については、南北方向の溝を1条検出するにとどまったが、溝の埋土内より奈良時代の初期および末期の土師器杯が出上したことから、当該期に長期間にわたって土地利用があったことが確認できた。弥生時代の遺構面については、これまで町主体の調査で検出したことのないものであり、今回の調査における遺構面の検出は、当該時期の生活面が存在したことを示す極めて重要なものであると考えられる。なお、出土遺物についても、遺構面の時期決定を易くする、状態の良い土器が出上している。

以上のように、今回概要を報告した2件の調査成果は、それぞれが島本町の歴史を考えるうえで大いに有意義であった。今後も引き続き遺跡範囲確認調査を実施し、遺跡範囲の周知に努め、島本町の歴史を体系的に捉えていく作業を行なっていくことが当面の課題と考える。

参考文献>

- 島本町史編さん委員会 編 1975 「島本町史 本文編」
- 島本町教育委員会 1991 「島本町文化財調査報告書」第1集
- 名神高速道路内遺跡調査会 1997 「越谷遺跡他発掘調査報告書」
- 「名神高速道路内遺跡調査会調査報告書」第2輯
- 島本町教育委員会 2006 「史跡をたずねて」改訂版
- 島本町教育委員会 2006 「島本町文化財調査報告書」第8集
- 島本町教育委員会 2006 「島本町文化財調査報告書」第9集

図 版



調査区全景（南から）

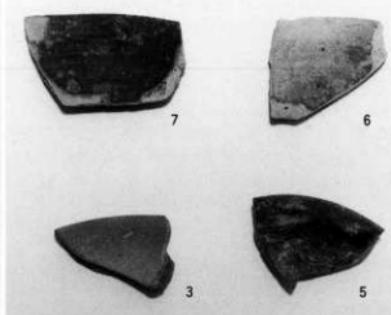


S D01 土層断面（南から）

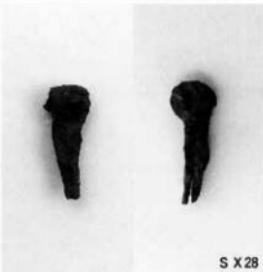
図版2

広瀬地区確認調査

表採・各遺構出土遺物



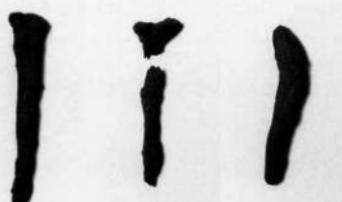
9



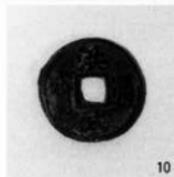
S X 28



8



S D 01



10



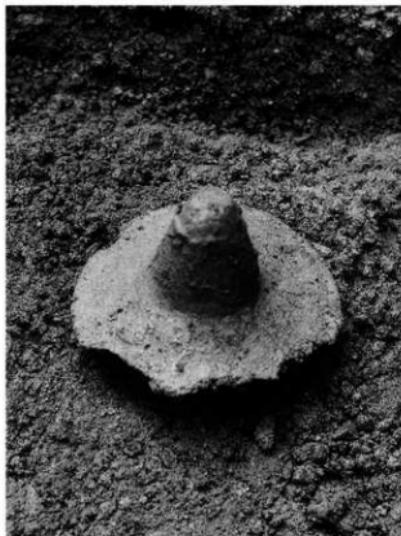
調査区北半 遺構面Ⅱ全景（南から）



調査区南半 遺構面Ⅱ全景（北から）



調査区南半 遺構面Ⅱ S D01遺物出土状況（南から）



調査区南半
遺構面Ⅱ 下層掘削時高杯出土状況（北から）



調査区南半
遺構面Ⅲ S D02検出時遺物出土状況（北から）

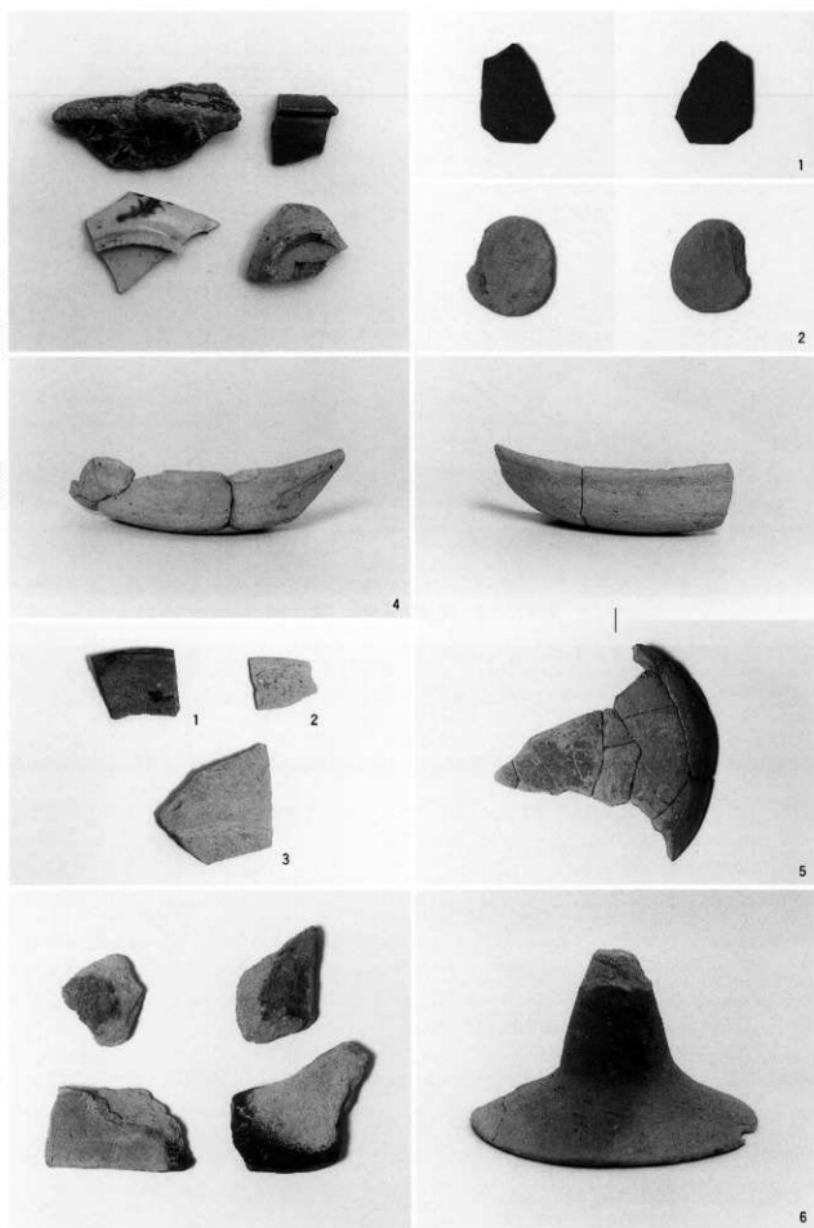


調査区北半 遺構面Ⅲ全景（南から）



調査区南半 遺構面Ⅲ全景（北から）

図版 6 青葉地区確認調査 遺構面Ⅰ・Ⅱ出土遺物



10

9

3

6

7

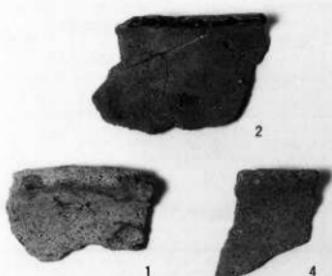
8

2

4

1

5



報告書抄録

ふりがな	しまもとちょうぶんかざいちょうさほうこくしょ						
書名	島本町文化財調査報告書						
副書名	広瀬地区・青葉地区遺跡範囲確認調査概要報告						
卷次							
シリーズ名	島本町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第10集						
編著者名	中津 梓 久保直子						
編集機関	島本町教育委員会事務局生涯学習課						
所在地	〒618-8570 大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号 TEL075-961-5151						
発行年月日	平成19年3月30日						

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
遺跡範囲								
ひろせ いせき 広瀬遺跡	しまもとちょうひろせ 島本町広瀬 五丁目地先	27301	14	34° 53' 00"	135° 40' 08"	2006.3.23 ~ 2006.3.31	600	遺跡範囲 確認調査

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
遺跡範囲								
あおば いせき 青葉遺跡	しまもとちょうあおば 島本町青葉 三丁目地先	27301		34° 52' 42"	135° 39' 46"	2006.11.27 ~ 2006.12.25	60	遺跡範囲 確認調査

島本町文化財調査報告書
第10集

発行 島本町教育委員会
〒 618-8570 大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号
TEL 075-961-5151

発行日 平成19年3月30日

印 刷 三星商事印刷株式会社
〒 604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町300
TEL 075-256-0961

